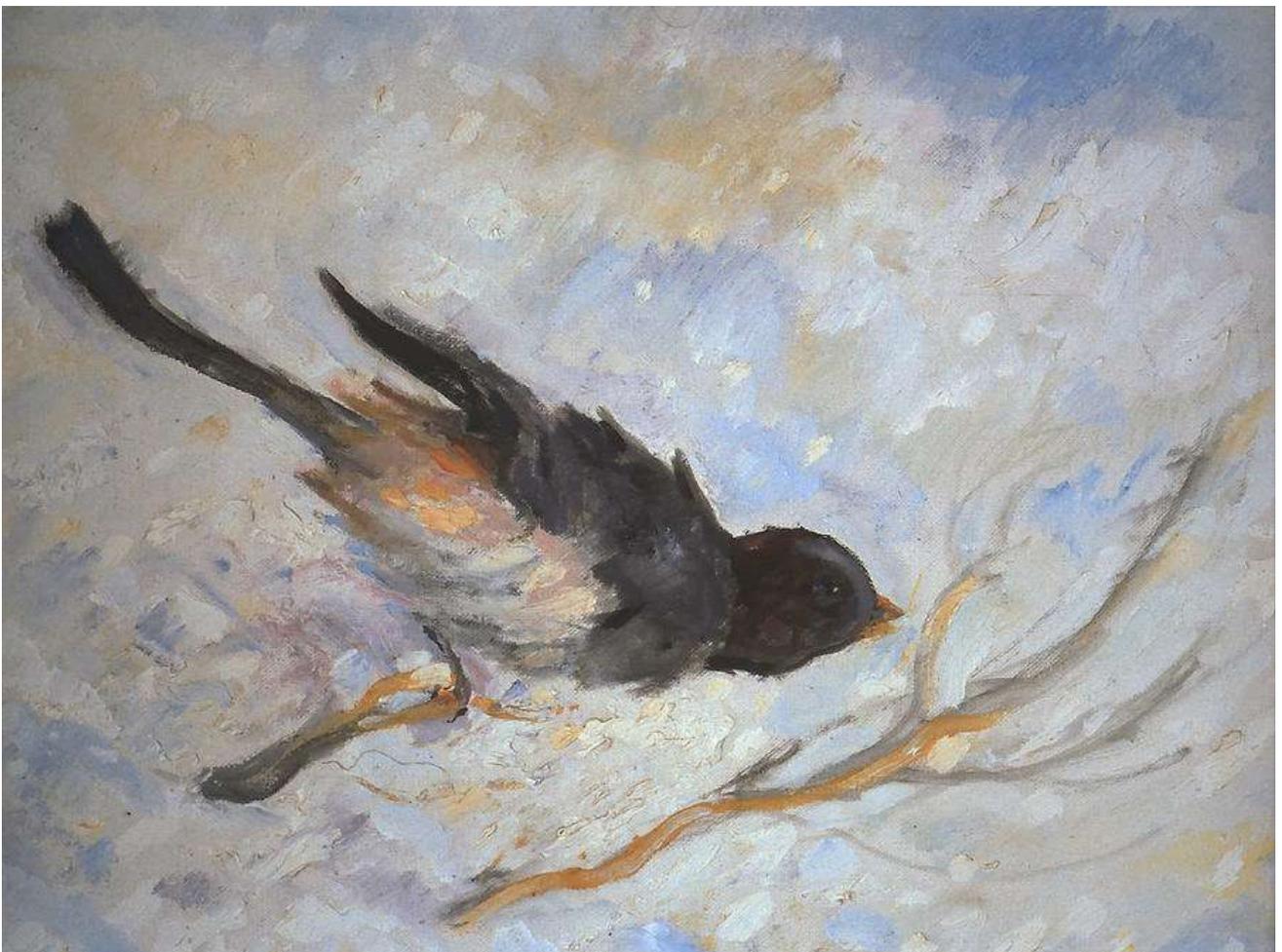

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 187

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3721. 静寂な日々と創造としての器
- 3722. 圧縮経験とシンプルな気づき
- 3723. 輝きとしてのリアリティ
- 3724. あの夏の工事の意味:フィボナッチ数列や黄金比を活用した作曲に向けて
- 3725. 論文の評価に関する夢
- 3726. 論文の評価に関する夢の続き
- 3727. 発達のペースメーカーとしての最適レベル
- 3728. バルトークの作曲語法からの学び
- 3729. 合宿所での夢
- 3730. 新刊書籍と監訳書について
- 3731. 極寒の午前
- 3732. 吹雪の中の微笑ましい光景
- 3733. 今朝方の夢
- 3734. 統合的作曲家ベラ・バルトーク
- 3735. サティとシャブリエ
- 3736. 今朝方の夢
- 3737. 化学の授業に参加しようとする夢
- 3738. 穏やかな日曜日の始まり
- 3739. 創造的狂気を守ること・育むこと
- 3740. 今朝方の夢

3721. 静寂な日々と創造としての器

時刻は午前七時を迎えた。これからゆっくと、一日の活動を始めていきたい。

この時間帯は、相変わらず闇に包まれているが、今日の闇はいつもと異なるように見える。そこには、白い雪が存在しており、闇と雪のコントラストは静かな美しさを持っている。

静かな生活。本当に毎日が、驚くべきほどの静寂さの中で進行していく。日々は平穩そのものであり、静寂そのもの。それは全く静止しているようでいて、その背後には耐えず何かが進行している。静寂さと動きの中に耐えずいるのが普段の私の生活であり、それが自分の人生に他ならないことが見て取れる。一見すると静かな隠遁生活に見える、この生活のあり方を継続させていく。それは決して消極的な隠遁生活ではなく、積極的な隠遁生活である。なぜならそこには、社会に耐えず関与していくという意味と実践が存在しているからだ。

自己に与えられたものを還元していく生活がこれからも続くだろう。そして、そうした生活はより強さを増すに違いない。

欧州での生活を通じて体現されたことの中で最も重要なものをあえて選ぶとするならば、それはこうした積極的な隠遁生活の存在を把握したこと、及びそれを実現させていく道の上を—ないしは道として—絶えず歩いている感覚が常にあることだろう。

今朝方起床した時、「今日も自分の内側に何かが通っていくのだろう」という考えが芽生えた。自己はもはや、通り過ぎていく何かを受容するものになった。また、内側で何かが通り過ぎていくことによって初めて、その存在が認識されるような対象になった。今日も間違いなく、自分の内側に無数のものたちがやってくる。それを形にしていく生活を続けていく。創造の器としての自己がここにある。闇と雪のコントラストをぼんやりと眺めてながら考えていたのは、そのようなことであった。

辺りに広がる白銀世界を眺めていると、ますます自然の美と人為的な美を統合させていきたいという思いに駆られる。それらの統合の果てに、新しい美を生み出していきたいという思いが強まる。まずは、自然の美に潜む法則を学んでいこう。まさに、バルトークは同様の点に注目をして、自然の美から法則性を掴み、それを基にした作曲実践に従事していきたい。

昨日、イギリスの書店から、“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000)”が届いた。早速中身を確認してみたところ、秘教的なシンボルが多数掲載されていることに驚いた。まさにそうしたシンボルは、自然の美が持つ法則を体現しているもののように映った。バルトークは、既存の作曲理論にはない観点をを用いて作曲実践を行っていたことが容易に分かった。

コペンハーゲンのニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館で購入した“The Secret Code: The Mysterious Formula That Rules Art, Nature, and Science (2008)”という書籍を、昨夜本棚から引っ張り出して読んでいた。自然が体現している幾何学的パターンを、今日の昼食前の作曲実践の際に活用してみようと思う。

昨夜この書籍に目を通していると、数年前にライデンの古書店で購入した“The Egyptian Book of the Dead: The Book of Going Forth by Day (2015)”という大型の書籍について思い出した。それは本棚ではなく、ソファの一角に積み上げられた書籍の一番下に眠っており、昨夜それを取り出して、中身を眺めていた。この書籍を購入する前に訪れていたライデンの博物館では、象形文字を解読するための小さな辞書が販売されていた。今から思えば、本書に掲載されているイラストの象形文字を解読するために、その辞書を購入しておけばよかったと少し思うが、それがなかったとしても、イラスト内に何かしらの規則性を見出していくことは可能だろう。

死者の書に体現されている規則性を掴み、それもまた自らの作曲実践に活用していこうと思う。こうした気づきや思いもまた、自分の内側を通過していったものに他ならず、やはり自己がますます創造の器と化していることがわかる。創造の根源に還る日まで、自らの創造活動が止むことはないだろう。フローニンゲン:2019/1/23(水)07:37

No.1603: A Stiff Dance

The highest temperature today is minus 3 degrees Celsius, and the lowest one is minus 9 degrees Celsius. I want to do a stiff dance in such an environment. Groningen, 08:23, Thursday, 1/24/2019

3722. 圧縮経験とシンプルな気づき

時刻は午前10時を迎えようとしている。外の世界は、一向に白銀世界のままである。

そこには凜とした美が佇んでいる。さらには、マイナスの世界固有の世界の息吹が存在している。そうした環境の中に自己を置くことで、自己が圧縮され、その圧縮が次なる拡張につながっていく。

欧州で経験する三度目の圧縮が今始まろうとしている。この圧縮経験を経た後、そこに待っているのは、もう今の自分ではないだろう。

先ほど、数羽の小鳥がピョピョと元気よく鳴いている声が聞こえた。白銀世界の中の大合唱だ。

赤レンガの家々の屋根に真っ白な雪が積もっていることによって、もはや空の白さと区別がつかなくなっている。そう思った瞬間に、びっくりしてしまった。「どこから空が始まっているのだろうか？なんと、今の書齋の中にある目の前、この目の前から空なのだ」という気づきが芽生えたのである。目の前の空間に手を伸ばした時、もうそれが空なのだとわかる。目の前も、後ろも横も、どこまで行っても空だったのだ。自分は空に包まれ、空の中で生きている。そんなシンプルな気づきが芽生えた。

シンプルな気づき。まさにこうした環境の中で芽生えるのは、そうした純粹かつ簡潔な気づきなのだ。それでいて、そうした気づきは強烈なまでに核心を得ている。

先ほども、自分の人生に関して、あるいは人間として生きていくことに関して、言語を絶する感覚的な気づきが得られたことを覚えている。その気づきはもうどこかに消えてしまったが、それが消えてしまったということと、それが確かに自分の内側に芽生えたことそのものが、つまり出現と消滅こそが、自分の人生の本質であり、人間として生きることの本質であるということが言える。

寒い。それにしても寒い。目の前で、世界で一番面白いコメディを鑑賞しているかのように笑える寒さだ。生きることは、やはり笑いなのだと思う。笑えないほどの真剣な笑いであり、笑えるほどの真剣な笑えなさなのだと思う。これに異論を挟む人はいないと思われる。夢から目覚めた人であれば。

奇妙なほどに何かが見えているような感覚がある。透徹な眼差しを、それを超越した透徹な眼差しで見返すという強烈な眼差しの意識がここにある。その意識は、白銀世界の白銀さと全く同じである。

つい先ほど、カモメの群れが戯れている姿を見た。それは実に微笑ましい光景であった。窓辺に近寄って観察してみると、どうやら一羽のカモメが口にパンをくわえていることがわかった。他のカモメは、そのパンを自分もかじろうと一生懸命になっている。

その光景は、幼稚園か小学校低学年のサッカーの試合を見ているようである。一つのボールに群がる子どもたちの姿と、目の前にいるカモメたちの姿は瓜二つであり、同時にそれらの光景は、この現代社会において、ボールやパンに類する消費対象に群がる現代人の姿を映し出しているように見えた。現代を生きる成人の多くは、一つのパンに破片に群がるカモメであり、一つのボールに集まる子供たちだったのだ。これもまたシンプルな気づきの一つである。

透徹な眼差を超越した透徹な眼差で眺めてみれば、このリアリティの諸々がシンプルであることがわかる。同時に、昨日かかりつけの美容師のメルヴィンが述べていたように、「このリアリティの諸事象は、シンプルであるがゆえに複雑であり、複雑であるがゆえにシンプルである」ということを心に留めておきたい。フローニンゲン:2019/1/23(水)10:15

No.1604: A Tempest and Stillness

As well as yesterday, I can see a winter wonderland outside today, too. Groningen, 12:06,
Thursday, 1/24/2019

3723. 輝きとしてのリアリティ

自分でもなぜ絶えず日記を書いているのかわからないが、とにかく書く。書けなくなるところまで書き、書けなくなっても何度でも書く。書くことによって自己を書かせることが、自己が真に生きる道である。まだまだ書く。

ふと思うのは、人生には希望も絶望もないのではないかということである。さらには、光も闇もなく、仮に存在するとすれば、希望と絶望、光と闇のそれら全てを含む爆発だけなのではないかと思えてくる。ここは説明が少し難しいが、人生には表層的な光を超えた、炸裂する光があるのではないかと思えてくる。まさに、目の前の裸の木に止まった鳩が、今この瞬間に炸裂的な閃光を発しているようなその輝きである。なるほど、それは輝きなのだ。希望でも絶望でも、光でも闇でもなく、それは輝きと形容できるようなものなのかもしれない。

輝きとして存在していたハトが飛び立ち、そこには誰もいなくなった。誰もいなくなったところに、カモメがやってきた。おそらくこれなのだろう。私たちの人生はこれなのだろう。

人生は笑いではないし、笑えないものでもなく、抱腹絶倒的な笑いであることは先ほど述べた通りである。やはりここでも、抱腹絶倒的な笑いにある爆発性、ないしは爆発に伴う輝きが本質としてそこにある。これも明々白々な事実のように思える。もう生きることに對して見間違ふことはないのではないかと思えてくる。

白銀世界の輝き、赤レンガの家々の輝き、目の前のパソコンの輝き、パソコンを打つ手の輝き、遠くの空を飛ぶ鳥たちの輝き、そして彼らの糞の輝き。それらの輝きが見えないうちは、私たちの本当の人生は一向に始まらない。目覚めてからが本当の人生の始まりであることを、一軒の赤レンガの家の煙突から湧き上がる煙が伝えている。

今日は極めて寒く、室内でもヒートテックを着る必要があるほどだ。普段は、コーヒーをカップ満タン（厳密にはカップ85%~87%の高さ）に注いでいるのだが、コーヒーが冷めるのを防ぐために、半分注いで、それを飲んでからまた半分注ぐことを試してみた。すると、逆に冷めるのが早くなったように思えてしまい、それを踏まえると、カップ満タンに注いだ時の方が効用（満足度合い）が高かったのではないかと思えた。物理現象さらには人間の心的現象は本当に面白い。

そういえば、少し前に知人の方から、ユニクロから「極暖ヒートテック」「超極暖ヒートテック」なるものが販売されていることを聞いた。私が数年前に日本で生活していた一年において、そのようなものはなかったように思う。少し気になったので、オランダにユニクロの店舗があるか調べてみたところ、アムステルダムに一店舗ほどあることがわかった。また、春に訪れる予定のパリやアントワープにも店があるようなので、両都市に訪れる時にそのうちの一店舗に立ち寄り、「極暖ヒートテック」「超極暖ヒートテック」のいずれかを購入しようかと思った。

さすがに問題ないとは思いますが、ベルギー人もオランダ人のように大きいため、念のためアントワープの店舗を避け、パリの店舗で購入をした方がいいかもしれない。三月のフローニンゲンはまだまだ冬であるから、その時に購入しても全く遅くない。フローニンゲン:2019/1/23(水)10:35

No.1605: A Dance on a Winter Night

I began to read “Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000),” which provides me with ample insights. I’ll apply one of Bartok’s techniques in my near future. Groningen, 17:38, Thursday, 1/24/2019

3724. あの夏の工事の意味:フィボナッチ数列や黄金比を活用した作曲に向けて

時刻は午後の八時を迎えた。今日という一日が静かに終わりに向かっている。

今日は確かにひどく寒かったが、寒さを忘れさせてくれるぐらいの鮮やかな雪景色を眺めることができた。白銀世界を眺めた時に喚起される独特の感覚が、自分の内側に色濃く残っている。この感覚は、今後の自らの肥やしになるであろう。

ふと窓の外を眺めると、車道と自転車専用の道路には雪が一切積もっておらず、黒い道としてそこにあり続けていることに気づいた。車道に関しては、自動車の熱などによって雪があまり積もらなくなっているのかもしれないが、去年の経験上、自転車専用の道路には雪がかなり積もっていたと記憶している。そこで私は、この夏に行われていた工事の意味を初めて理解した。この夏、自転車専用の道路を大々的に工事していたのは、冬の雪に備えてのことだったのかもしれない。

夏の期間、毎朝早くから仕事に取り組んでいた作業員たちの姿が思い出される。彼らの仕事の様子を早朝から見ていた者は少ないだろうが、私は毎朝彼らの仕事ぶりを見ていた。

市民が、今このようにして凍結することのない道路を自転車で通ることができるのは、あの夏の作業員たちの仕事があったからなのだ。それを思うと、大変感慨深い。

今日はこれから本日五度目の作曲実践を行う。今朝は早く起床したおかげもあってか、日中には読書に勤しみながらも、一日に五回も作曲実践ができることは幸福感をもたらす。

昼食前から午後にかけて、12音技法を用いて作曲をする際に、フィボナッチ数列を意識して曲を作っていた。途中までそれを意識していたのだが、最後の最後でその試みに従事しているのを忘れてしまい、最後は若干数列の特性が乱れてしまった。このアイデアは次回また挑戦しようと思う。

今回フィボナッチ数列を活用したのは、バルトークの影響である。近々、黄金比の一つである、 Φ (ファイ:1.6180339887499...)をどうにか工夫して活用してみたいと思う。フィボナッチ数列を活用しようとした時のように、形式に適用するか、ハーモニーやメロディーに適用できればと思う。

本日最後の作曲実践が終われば、“The Secret Code: The Mysterious Formula That Rules Art, Nature, and Science (2008)”を読み進めたい。さらには、誰かしらの楽譜を眺めようと思う。今後は、隙間時間がある都度、無数の楽譜を何気なくぼんやりと眺めたり、意識的に眺めることを行っていく、発見を求めて意識的に眺めることもあれば、感覚として音楽記号のパターンを自らに取り入れるようにぼんやりと眺めることを行っていく。そのようにして、音楽的な知性と脳を構築していこうと思う。フ
ローニンゲン:2019/1/23(水)20:27

3725. 論文の評価に関する夢

昨日に引き続き、今朝も五時過ぎに起床した。早朝に少しばかり調べ物をする必要があり、早朝の日記を書き留めておくのが遅れたため、今から少しばかり日記を書いておきたい。

まずは今朝方の夢について振り返ると、同じ主題の夢を二つほど見ていた。それらは登場人物と主題が同じなのだが、夢の場面が異なっていた。

最初の夢の中で私は、昨年までお世話になっていた論文アドバイザーのミハエル・ツショル教授のコースを受講していた。それは大学院レベルのコースであり、私は一人の日本人の友人と一緒に、課題論文を執筆し、それをツショル教授に提出した。

ちょうどその日のクラスでは、協働執筆した論文の評価を得た。私たちの論文に付された評価をみると、5段階評価のうちの3であり、思っていたよりも低かった。正直なところ、期末に提出する論文に関してこのような低い評価を得たことがなく、なぜ自分たちの論文がこのような低い評価なのかを知りたいと思った。不思議なことに、教室には、オーストリア人のツショル教授以外は、生徒は皆日本人だった。

私がクラスみんなに呼びかけると、ほとんどのグループは3の評価をもらっているようであり、一組だけ5の評価を得ているようだった。そのグループの二人は、小中高時代の幼馴染みの男女であり、

彼らの論文を読ませてもらうことにした。最初、男性の友人(SS)は、私が論文の粗探しをするのではないかと警戒していたが、そうではない旨を伝え、論文を読ませてもらえることになった。

論文を開いた瞬間に気づいたが、それはそれほど質の高いものではなかった。単に分量が多いただけであり、500ページほどの論文だった。まるでそれは、博士論文のような分量であり、これだけたくさん文章を執筆したことは評価できるが、その内容はお世辞にも良いものとは言えなかった。一方、私たちの論文は40ページほどであり、それでも期末に提出するものとしては十分であった。論文の質に関しては、まちががなく、私たちが執筆したものの方が高く、これが私の思い込みなのかを検証するために、二つの論文の執筆者の名前を伏せて、教室にいたその他の友人六名ぐらいに読んでもらうことにした。

六名に論文を渡すと、彼らは論文を裏返し、白紙のページに簡単な方程式を書き始めた。私はそれを見たとき、彼らは一体何をしているんだと思い、論文の読み方を若干教えた。六人は私の指示に従って論文を読み始めたのだが、それが英語で書かれているためか、内容を理解することは難しいようだった。私が期待していたのは、内容の細かな理解ではなく、両者の論文の質であり、正直なところ、それは論文を開いたらすぐにわかるはずだと私は思っていた。

私はしびれを切らして、「3秒で評価しろ！」と声を荒げた。すると、友人たちはハッとしたような表情で論文を懸命に読み始めた。結局、彼らから二つの論文の評価について聞くのを待たずに、私は職員室に向かった。ここは大学院のはずなのだが、どうも建物は高校時代の校舎のようであり、その職員室にツシヨル教授がいる。職員室の中でも、ツシヨル教授を除いて、後のすべては日本人の教師だった。私は冷静になって、ツシヨル教授から論文の評価方法について尋ねた。

話を聞いていると、ツシヨル教授は、論文を評価する明確な観点を持っていないことが判明し、どうやら自分に理解できる内容のものに高い評価を与えているようだった。厳密に言えば、自分が好む理論や、望ましい研究結果を提示しているものに高い評価を与えているようだった。それに気づいた時、職員室にいる他の教師全員に聞こえる形で、この学校の教師の無能さを激しく指摘した。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/24(木)07:05

No.1606: A Whistle of a Winter Little Bird

A little bird came to the window of my apartment. The bird looked as if it enjoyed whistling in the early morning. Considering the severely low temperature, I'm impressed by the bird's life energy.
Groningen, 21:13, Thursday, 1/24/2019

3726. 論文の評価に関する夢の続き

今日の気温もまた、とにかく低い。最高気温はマイナス3度、最低気温はマイナス9度である。

ちょうど今、一日分のコーヒーが完成した。食卓の窓から外を眺めた時、通りを走るバスの姿が見えた。雪が積もらないような工夫が道路にしてあるためか、道路に雪は積もっていないのだが、バスはいつもより随分ゆっくりと走っていた。それは自転車の速度と同じぐらいにゆっくりだった。

今朝方の夢の続きについて振り返っておきたい。夢の中で私は、ある大きな屋敷の中にいた。この夢でもまた、最初の夢と同様に、友人と一緒に執筆した論文の評価がテーマだった。

屋敷のある一室で、担当教授のミハエル・ツシヨル教授から、論文のフィードバックを受けていた。5段階評価のうち、5を取得した友人の論文と、3の評価が付けられた私たちの論文を比較することをその場で行っていた。5を取得した友人の論文のある節の横に、「+3」と書かれており、私たちの論文の同じ節の横には、「+1」と書かれていた。どうやら、各節ごとに評価ポイントが明記されており、その合計が最終的な評価になるらしかった。

私は、「+3」を得た論文のその節を眺めたところ、それは相変わらず長いだけであり、質的には乏しいものだった。ツシヨル教授の話を知ると、やはり分量の多さを評価したとのことだったのが、そこに書かれている内容はかなり稚拙であった。そうしたことから私は、「“pee”を1000回書いたら高い評価になるのか？」と、ツシヨル教授に詰め寄るように聞いた。すると、ツシヨル教授は少したじろぎながら、「そういうわけではない・・・」と小さな声で述べた。

論文を評価する観点がなく、またそうした能力もないツシヨル教授に対して、私はかなり残念な気持ちになった。そこで、論文と一緒に執筆した友人と共に、日本刀を取り出し、ツシヨル教授を成敗す

ることにした。取り出した日本刀の刃先は白く輝いており、よく切れそうだった。それを見たツシヨル教授は恐れ慄き、その部屋から逃げ出した。

友人と私はとても冷静な気持ちで、屋敷の中の一つ一つの部屋を確認していった。ある部屋に到着すると、そこは畳しかない部屋だった。もう一つ挙げるとすれば、部屋の奥に開放的な窓があり、それはちょうど開いていた。窓の外を眺めると、城下町が広がっており、この屋敷の周りには堀があり、そこには綺麗な水が流れていた。

景色を眺めた後、ふと振り返ると、自分の手に大きなカミキリムシが乗っていることに気づいた。それも三匹ほどだ。それら三匹のカミキリムシは、体が非常に大きく、黒々とした光沢を持っていた。その三匹はとてもおとなしく、こちらに危害を加える様子にはなかった。私はゆっくりと、一つ一つのカミキリムシを自分の手の上から畳の上に置いていった。三匹のカミキリムシを畳の上に置くと、私は再び日本刀を持って、屋敷の中に隠れているツシヨル教授を探しに動き始めた。

今朝方はそのような夢を見ていた。昨年大変お世話になったツシヨル教授が、このような形で夢に出てくるとは思ってもいなかったことである。

ツシヨル教授は米国の大学で六年勤務した後、フローニンゲン大学にやってきたのだが、結局昨年の一年ほど在籍しただけで、再び米国に戻ってしまった。今回の夢はひよっとすると、師を乗り越える主題を暗示しているように思う。この主題についてはいろいろ思うことがあるが、それらを今書くことをしない。フローニンゲン:2019/1/24(木)07:32

No.1607: Before Daylight

It will be severely cold today, too. I thought so before daylight. Groningen, 07:56, Friday,
1/25/2019

3727. 発達のペースメーカーとしての最適レベル

早朝に、いつもと同じように作曲実践をしていると、不思議な感覚になった。ある一つの音符を置き、音を鳴らしてみた瞬間に、そこに一つの音楽空間が立ち上がってくるかのような現象を知覚したの

である。実は、昨夜の作曲実践の際にも不思議な体験をしていた。それは、自分が作曲ソフトの楽譜上に置いた音符を鳴らしてみた時に、それが青白く光っているように思えたのである。

昨日は五曲ほど曲を作っていたため、何かの閾値を超えたのかもしれないし、最後の作曲は一日の終わりに行っていたから、何かしらの疲労があったのかもしれないと思った。しかし、その時には一切疲労感はなく、一瞬青白く光った音符を捉えた体験がより不思議に思えた。

今朝方に体験していたのは、色を知覚するものではなく、置いた音符によって、音楽宇宙が確かに創造されていくことを知覚したのである。それは本当に小さな宇宙なのだが、間違い無く、新たな宇宙空間としてそこに立ち現れていた。

今日も様々な作曲家に範を求めて作曲実践を行っていこうと思う。何度も述べているように、彼らの楽譜を眺めることは、自分にとってスキヤフォールディング効果として働き、作曲という能力領域における自分の最適レベルを引き出してくれる。そして、最適レベルは機能レベルに先行する形で発達していくことを思い出すと、常日頃の実践は、やはり過去の作曲家の楽譜に力を借りて、自分の最適レベルを発揮していくように心がけていこうと改めて思った。

昨今、成人発達理論を活用した人財育成が普及し始めている。しかし、そこで行われていることを見聞きしていると、そこには急激に発達を促そうとする傾向が強く存在している。しかも問題は、大した支援体制のないままに、無理にその人の機能レベルを引き上げようとする傾向が見られることだ。機能レベルの発達というのは、実証研究が示しているように、本当に長大な時間を要する事柄である。

最近私は、「発達することは果たして必要なのだろうか？」という問いをよく投げかける。その問いに対する答えは、確かにYesだと思うが、発達をする前提条件やその必要性をほとんど考慮に入れることなく、発達を急かそうとする風潮に待ったをかける意味で、そのような問いを投げかけるようにしている。

人々は発達に関して、あまりに前のめりすぎる。企業社会の人財育成に関わっていて思うのは、機能レベルの発達は必要なのだが、それそのものに働きかけようとしてもほとんどうまくいかないのではないかということである。機能レベルというのは、そもそも自分一人で発揮出来る力のことを指し、

それを涵養するのも基本的には独力である。あるいは、それは自分の内側から徐々に涵養されていくものだと言えるかもしれない。

上述の通り、機能レベルの発達には長大な時間を要するという、そしてそれは、最適レベルの後を追っていく形で発達していくことを考えると、その人がいかに最適レベルを発揮できるかの仕組み・環境作りに力を入れていった方がいいのではないかとよく思う。そのようなことをぼんやりと考えていた。フローニンゲン:2019/1/24(木)09:07

No.1608: A Shooting Star on a Winter Night

It stopped snowing, but it started to rain. Groningen, 17:43, Friday, 1/25/2019

3728. バルトークの作曲語法からの学び

時刻は午後の八時を迎えようとしている。今日は極めて寒く、今の気温はマイナス4度である。そうした寒さの中、今日も普段と変わらずに、自分の日々の取り組みに従事していた。

先日イギリスの書店から届けられた、“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000)”を今日から読み始めた。本書はタイトルにあるように、バルトークの作曲手法について解説をしているものである。本書を読み始めてすぐに気づいたが、本書から得るものが非常に多く、大変感銘を受けた。自然の美に体现されている法則性を活用して作曲を行っていたバルトークの思想に大変共感をし、彼の技術から得られるものはできるだけ得ようという思いが高まった。中でも、五度圏における対極性を活用した技法は非常に興味深く、早速明日にでもそれを活用した実験を行ってみたい。

今日の昼食前に、ショーンバーグが考案した12音技法を活用して作曲を行ったが、バルトークが考案した12音技法の方が調性が維持されており、自分にとってはより魅力的に映り始めている。ショーンバーグの作曲語法よりも先に、バルトークの作曲語法を参考にしていくことにする。

ここ最近では、あまり転調を活用することはなかったので、明日の作曲実践においては転調を活用するような曲を作ってみよう。その際には、ピボットコードだけではなく、他の方法によって転調を行っていく。「転調」という言葉を入力しようと思ったら、「転生」という言葉に誤変換してしまった。だが、

調を曲にとっての命、ないしは魂と見立てれば、転調とは曲にとっての転生であると言えなくもない。

先日、ぼんやりと窓の外を眺めていると、葉っぱのフラクタル性に目がいった。それを眺めていると、なんとも言えない心地良さがあった。私たちはフラクタル性に心地良さを感じるのかもしれない。バルトークもきっと、自然を眺めてこのような感覚に浸っていたのではないかと想像される。そして、バルトークの場合は、その感覚を曲の中に再現していく術を編み出したのだと思う。それをこれから学んでいこう。

私たちが自然の中に美を見出すのは、規則性の中にある秩序と私たちの内側にある規則性の秩序が共鳴をし合っているからなのかもしれない。外面宇宙の秩序と内面宇宙の秩序が響き合っている姿を想像することができる。もしかすると、秩序のみならず、混沌、ないしは外面・内面の宇宙に潜む決定論的カオス同士が共鳴している可能性もある。

外面・内面宇宙にある様々な規則性、その中でもフラクタル性をなんとか曲の中に活用していく道を見つけていく。曲にホロン階層を設け、それらがフラクタルをなし、内側に響くような曲を作りたい。フローニンゲン:2019/1/24(木)20:10

3729. 合宿所での夢

今朝は五時半に起床し、六時過ぎに一日の活動を始めた。今の気温はマイナス6度であり、午前九時にピークであるマイナス7度となる。今日はどうやら昼過ぎから雪が降り始めるらしい。雪が降る前に、近所のスーパーに買い物に出かけようと思う。今日の昼過ぎに雪が降り始めることを含めると、今日の午後から数日間は天気が良くない。そうしたこともあり、四日分の食料を購入しようと思う。

普段は木曜日か金曜日に、行きつけのチーズ屋に行くのだが、昨日と今日はあまりに寒いため、今週はチーズ屋に足を運ぶことはなさそうだ。その代わりに、近所のスーパーでナッツ類とチーズ類を購入しようと思う。

今日の気温のグラフを見ると、不思議な形をしており、午前九時にピークの寒さであるマイナス7度に達すると、そこからは徐々に気温が上がっていき、なんと最も気温が高くなるのは深夜だ。気温が

山形ではなく、右肩上がりにゆっくりと上がっていくのが今日の気温の特徴である。幸いにも寒さがひと段落し、今日の深夜には6度まで気温が上がるらしい。

一日の活動を始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、小学校時代の友人一同と、勉強合宿に参加していた。勉強合宿と言っても、そこで机について勉強するわけではなく、ほぼキャンプのようなイベントだった。

何人かの友人たちと座敷のような部屋で雑談をしていると、一人の女性の友達(AS)が、私の作曲の響きが最近よくなった、と述べてくれた。それを聞いて純粹に嬉しく思った。彼女曰く、何かしらの要因で、感性が磨かれているからだろう、とのことであった。その後、私たちは合宿場の一番上の階に行き、そこでまた話をしていて。その場にいたのは親友の三人であり、私たちは、少しばかり意見が食い違う話題について話をしていて。それがどのような話題であったかは覚えていないが、私は皆の意見の調停役としてそこにいた。

すると、ある友人が部屋に入ってきて、中学校時代にお世話になっていた数学の女性の先生が私を呼んでいるとのことであった。今日は学校に姿を見せずにいるから、そのことで先生は怒っているのかもしれないと思った。先生の呼び出しをくらったため、私はその場を後にし、ちょうど合宿場の隣にある学校に向かった。その学校は、モダンな塔になっており、私は最上階に向かった。

最上階に到着すると、そこには広大なスペースが広がっていて、見晴らしの良い造りになっていた。ただし、スペースの真ん中には建物の軸が通っていたため、ドーナツ状の空間になっており、私はスペースを一周する形で先生を探す必要があった。いざ一步を踏み出そうとしたところ、後ろに人の気配を感じた。どうやら、高校時代の女性の友達が二人ほど、私の後をつけているようだった。

後ろから声をかけられたので、振り向くと、一人の女性は物陰に隠れた。もう一方の女性が私に近づいてきて、宿題の中に解けない問題があるから教えて欲しい、と言う。私は問題を見て、その解法をさっと伝えた。その女性は笑顔で私にお礼を述べ、二人はその場から去っていった。そこでふと、先生から呼び出しをくらっていたことを思い出し、急いで先生を探した。

最上階を半周したところにあるエレベーターの近くに先生がいた。私は先生に声をかけると、先生は笑顔で私にハグをしようとしてきた。しかし、先生からの呼び出しを受けてから、私は走ってここに

向かっていたため、汗だくであり、先生はハグすることを止めた。先生は別に怒っているわけではなく、今日私が学校に姿を見せなかったことを心配しているようだった。私は、今日は履修しているクラスはなく、今は合宿に参加中であることを伝えた。すると、先生は納得の表情を浮かべ、「合宿を楽しんで」と述べた。

私たちはその場で別れ、私は再び合宿所に戻った。これから九州の合宿所に移動するらしく、親友の一人(NK)が車の整備をしていた。温められているエンジンを見ていると、夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/25(金)06:43

No.1609: A Play between a Snow Giant and a Little Bird

It represents a little bird that perches on a shoulder of a snow giant in order to soothe the emotion of the giant. Groningen, 21:10, Friday, 1/25/2019

3730. 新刊書籍と監訳書について

今、夜が明けようとしている。赤レンガの家々の屋根に積もった雪が、うっすらと姿を現し始めた。

今日は本当に底冷えする。天気予報を改めて確認すると、昼あたりから雪が降り始めるようなので、今日は早めに近所のスーパーに行きたいと思う。ただし、その際の気温はマイナス6度ぐらいであろうから、暖かい格好をしていく必要がある。

いよいよ本日より、解説・監修を務めた『リーダーシップに出会う瞬間』が発売される。構想からおおよそ一年で無事に書籍が発売されたことを嬉しく思う。本書は、成人発達理論の観点から、リーダーシップの発達プロセスを扱ったものである。本書がどのような反応を受けるのかを楽しみにしている。

今のところ、今年はまだ一冊、監訳を務めている翻訳書が出版される予定だ。こちらはアメリカの思想家ケン・ウィルバーの書籍であり、それはウィルバーの入門書として位置付けられるが、それでも発達理論に関して重要な洞察をいくつも含んでいる。もしかしたら、今年はこの一冊以外にも、もう一冊ほど成人発達理論関係の翻訳書の監訳を務めるかもしれない。過去に一度だけ、以前師事していたオットー・ラスキー博士の書籍を翻訳したことがあるが、おそらく私は今後翻訳をすること

はないだろうと思われる。ただし、監訳者として、意義のある洋書を日本に紹介することには積極的に関与したいと思う。

いつもの通り、早朝に作曲実践を行った。その際には、普段使わないような和音を活用してみるという実験をした。結果として、これは非常にうまくいき、いろいろと発見があった。やはり和音は奥が深く、まだまだ自分の知らない音の組み合わせがあることを知る。引き続き、和音の探究を重ねていきたい。

今日は昨日に引き続き、バルトークの作曲技術を解説した、“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000)”の続きを読み進めていく。本書は100ページほどの薄い書籍だが、得るものが極めて多い。昨日は最初から読み始めて、70ページのところまで読み進めた。今日中に一読目が完了するだろう。

初読を終えたら、本書を参考にしながら、作曲実践を行っていく。今すぐにでも活用してみたい観点があり、それを今日ないしは明日からの作曲実践で適用してみる。当面は本書を繰り返し読むことによって、バルトークの作曲技術から得られるものをできるだけ得るようにする。フローニンゲン：

2019/1/25(金)08:10

No.1610: A Winter Crevice

It has been raining since last night. All snow melted. It seems to me that winter has an intermission. Groningen, 09:43, Saturday, 1/26/2019

3731. 極寒の午前

今日は早朝の予想通り、途轍もなく寒い。つい先ほど、近所のスーパーに出かけてきた。自宅から一歩外に出ると、もうそこは別次元の寒さだった。実際には、自宅の扉を開け、螺旋階段を降りている時からその寒さを感じていた。午後から雪が本格的に降る前に、買い物に出かけておそらく正解だったのだと思うが、それにしても芯から冷える寒さだった。衣服を着込み、マフラーとニット帽を着用しても依然として寒かった。過去の日記を見ていると、三月の前後に一度暖かくなり、三月初旬

でもまだ最低気温はマイナスの日があることがわかった。ここからしばらく寒さと寄り添っていきそうな日々が続いていく。

今日は午前中に、バルトークの作曲技術に関する書籍の初読を終えた。本書から得るものは極めて多いため、今日の午後からは、早速再読を始めたいと思う。その際には、書籍に掲載されている譜例の音符を実際に作曲ソフトの楽譜上に並べて、丁寧に読み返していきたい。今回、バルトークという一人の作曲家の作曲技術に焦点を当てた解説書を読んでみて、改めて、音楽理論家の仕事に敬意を表した。

以前の私は、音楽理論家は単なる解説者であり、「作らない人」だと見なすこともあったが、彼らの仕事の意義を考えてみると、そのような見方が間違いであったことがわかる。彼らは彼らなりの創造活動に従事しており、分析を通じた観点という産物を生み出しているのだ。創造の産物としての観点から得られることは本当に多い。音楽理論家が、ある作曲家の技術を言語化してくれるおかげで、言語化された観点を参照しながら作曲実践に従事することができている。その恩恵を忘れてはならない。

今後も、誰か特定の作曲家の作曲技術に焦点を当てた解説書を積極的に読んでいこうと思う。いくら楽譜を眺めていても、音楽理論を専門としているわけではない自分が気づけることには限界がある。音楽理論家の解説書を読む一つの意義は、まさに自分では得られないような観点を得ることにあるだろう。そうした観点を今後も積極的に得ていき、それを基にして作曲実践をすることで、自分なりの新たな観点を獲得していきたいと思う。

午後からは、バルトークの書籍を読むことに並行して、もう一度、音楽理論の基礎的なテキストを読み進めていきたい。とにかく繰り返し音楽理論のテキストを紐解き、徐々に知識基盤を強固なものにしていき、得られた知識を絶えず実践に活用していく。

顔を上げてみると、太陽の光が地上に降り注ぎ始めた。今から少しばかり太陽の姿を拝むことができそうである。その後、雪がやってきそうだ。フローニンゲン:2019/1/25(金)11:49

The chilly world has scintillation. Groningen, 15:46, Saturday, 1/26/2019

3732. 吹雪の中の微笑ましい光景

時刻は午後の四時を迎えようとしている。天気予報の通り、昼食後しばらくしてから雪が降り始めた。今も淡々と吹雪いている。「淡々と吹雪いている」という表現はどことなくおかしさを含むが、それは確かだからしょうがない。今も書斎の眼の前では、吹雪が白い波となって、風に乗る形で地上に降りつけている。この様子だと、明日にかけて雪が積もりそうだ。

先ほど、微笑ましい光景を目撃した。書斎の窓に近寄り、外の景色をぼんやりと眺めていると、小さな女の子が、同じぐらいの大きさの弟をそりに乗せ、それを一生懸命引っ張っている姿を見た。その小さな女の子は、懸命にそりを引っ張っているのだが、亀が歩く速度ほどでしか進んでいかない。その横にいた母親はしばらくその様子を見ていたが、途中でそれを見かねてか、一緒にそりを引っ張り始めた。吹雪の中で、そのような微笑ましい光景を眺めていた。

今日はこれから、夕方の作曲実践を行う。バッハの曲に範を求めて一曲作り、その後は、バルトークの作曲技術を解説した書籍の再読を始める。午前中の日記で書き留めていたように、再読からは、書籍に掲載されている譜例を、実際に作曲ソフトの楽譜上に再現していく。そのようにして身体を通じて学習を行っていき、作曲技術の観点を身体知にしていく。

とにかくこうした事柄を毎日地道に続けていく。これまでの日々もそうした地道な実践で成り立ってきたのであり、これからもそれは変わらない。いつかそうした地道な実践が、想像もつかないほど巨大な何かとなって出現することを自分は知っている。

昨夜夕食を摂っている時に、音楽理論に関するポッドキャストを聞いていた。そこで取り上げられていたのは、音楽の起源に関するものだった。人類の歴史を遡ってみれば、音楽は様々な用途で活用され、用途の変遷と合わせて音楽も徐々に進化していったように思える。実利的に音楽を活用するのではなく、芸術としての音楽に関して言えば、旧石器時代から人類は、より美しい響きを求めて音楽を探求し続けてきたと言えるのではないかと思う。

今書齋の中で流れている曲の作り手であるチャイコフスキーもそうした流れに位置付けることができるだろうし、これから参考にするバッハもそうだ。さらには、最近注目をしているバルトークもまさにそうだ。様々な作曲家が美しい響きを求めた探究の成果を享受するだけでなく、そこから新しい美の創出に向けて探究と実践を続けていきたいと改めて思う。

白いカモメの群れが、吹雪の中を優雅に舞っていく。彼らは寒さを物ともせず、どこかに向かって飛んでいく。フローニンゲン:2019/1/25(金)16:08

3733. 今朝方の夢

今朝は七時過ぎに起床し、八時を迎える前にゆっくりと一日の活動を始めた。昨夜の就寝もいつも通りであったことを考えると、今日は十分な睡眠を取っていたと言える。

起床してみると、昨夜からの雨がまだ降り続けており、そのおかげで雪が全て溶けていた。昨日までは、歩くのが困難なほどに雪が積もっていたので、一旦雪が全て溶けたことは喜ばしい。ここから数日間は天気が崩れるようだが、総じて気温は比較的高い。ただしこれは、極寒の冬の中休みであることを私は知っている。来週あたりにまた、マイナスの世界がやってきそうな気配がする。

今日も一日の活動を始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、小中高時代の幼馴染みの女性の友人(MH)と、自転車を押しながら道を歩いていた。彼女は怪我をしているようだったが、幸いにもそれは大きな怪我ではない。彼女の怪我の定期検査のため、私たちは病院に向かっていた。

病院の入り口に到着すると、「どこに自転車を駐車すればいい？」と彼女は私に尋ねてきた。「駐車は自分がやっておくから、早く受付に行って検査を受けて」と私は述べた。彼女はお礼を述べ、一階の受付に入ろうとしたが、「トイレはどこだったけ？」と私に尋ねてきたので、「受付の右」と私は答えた。

自転車の駐車に関して、外に停める場所がなく、この病院は、病院内に自転車を持ち込んでも大丈夫であり、なおかつ病院内にも駐車場があることを思い出した。そのため私は、二台の自転車を押しながら病院内に入った。するとそこは、日本の病院のような雰囲気を持っていながらも、外国人

の姿がちらほら見えた。彼らの言葉に耳を傾けてみると、一様に英語であり、その音からアメリカ人であることがわかった。

トイレを済ませた友人が受付に向かう姿を見たところで、急に私は瞬間移動をして、学校の教室内にいた。どうやらそこは、実際に通っていた中学校と高校が混ざり合ったような場所であった。教室の中には、中学校時代のクラスメートが多くいて、数学を担当していた先生の授業を聞いている。私も授業を聞いている一人だったのだが、席に着くことせず、教室の右の隅で中腰になって授業を聞いていた。

先生が私の横の友人に質問をし、友人がその質問に答えた後に、今度は私に質問をしてきた。自分への問いは、「先々週の授業で扱った、「揺らめき」とはなんだったか？」というものだった。質問を受けた時、私はお腹が空いていたので、せんべいを口にほうばった瞬間だった。先生から突然質問を受けたため、私はほうばったせんべいを口から出し、左手に隠し持ったまま、噛んでしまったせんべいだけは早く噛み砕こうと思って少し間を置いた。先生も私がせんべいを食べていることを知っていたが、特にそれを咎めるわけでもなく、私が回答するのを静かに待っていた。せんべいがある程度噛み終えたところで、私はその質問に答えた。

生命現象にとって揺れは不可欠であり、ダイナミックシステムとしての生命において、揺れがいかにか発生するのかについて説明をした。すると、先生は納得した表情を浮かべ、今から配る塗り絵シートを外で塗ることを私たちに持ちかけてきた。

その日は天気良かったので、外に出て、陽気な太陽の光と穏やかな風を感じながら塗り絵をするというのは良い案だと思った。シートを受け取ったクラスメートは、早速教室から外に出て行った。先生もそれに続く形で教室を後にしたのだが、私はせんべいを食べてから教室を後にしようと思った。すると、先ほどとは異なる幼馴染みの女性の友人(KE)がトイレに行きたいと言う。ただし、綺麗なトイレじゃないと嫌だそうであり、綺麗なトイレがどこにあるかを私に聞いてきた。私は、三階の職員室前のトイレを教えた。彼女はそこからスッと消え、私は教室を後にした瞬間に、外に出る前に隣の教室にいる友人に話をしようと思って、隣の教室に入った。そこには女子しかおらず、彼女たちと二、三言葉を交わしたところで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/26(土)08:16

No.1612: A Snowy Cradle

Although it didn't snow today, I had a feeling as if I were in a snowy cradle. Groningen, 20:28,
Saturday, 1/26/2019

3734. 統合的作曲家ベラ・バルトーク

たった今、一日分のコーヒーを入れ始めた。今日は土曜日であるから、辺りは休日の雰囲気を持っている。時間の流れもいつもより緩やかであり、人々がどのような意識を持ってその日を過ごそうとしているかが、その場の雰囲気や時間感覚を変えてしまうことは面白い。この世界の様々な場所において、雰囲気や時間感覚が異なるのはそうした理由なのだろう。共有されている集合意識は、場の雰囲気や時間感覚を大きく規定するのだ。

今もまだ、雨がしとしとと降っている。昨日まであれだけ積もっていた雪が、一夜にして完全に溶けてしまうというのは圧巻である。

今朝方の夢について先ほど振り返っていたが、二つの場面で共に、「トイレ」のシンボルが現れていたことは興味深い。また、普段の夢と比べて、やたらと女性の友人が夢の中に登場していたように思う。夢の中で見た男性は、私が教室の右隅に中腰で座っていた時に左横にいた友人だけだったように思う。あとは全員女子であった。それらのシンボルが示唆することに関しては、ゆっくりと考えを巡らせようと思う。

今日もまた、過去の日記の編集や作曲実践に多くの時間を充てていこうと思う。過去の日記の編集は着実に進んでおり、これまで溜まりに溜まった未編集の日記が徐々になくなっていく様子が見える。この調子で進めていけば、三月末までには未編集の日記がなくなるかもしれない。毎日少しずつ過去の日記を読み返していこう。

日記の編集と作曲実践に加えて、今日もバルトークに関する書籍を読んでいく。まずは、“Mikrokosmos Complete (2016)”の楽譜に適宜挿入されている、バルトークに関する解説文を読んでいくことにする。注記も含めて、今日中に全てを改めて一読したい。その後、ここ数日に引き続き、“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000)”を読み進めていく。昨日から二読目を始めたのだ

が、再読から得られるものがやはり多く、今日もまた新たな観点を得ることができるだろう。私がバルトークに多大な共感の念を持っているのは、バルトークが自然を愛し、自然に敬意を払っていたからだけではない。

上記の書籍の中でも言及されていたように、バルトークは様々な民族音楽の音楽システムを統合しようと試み、独自の作曲語法を構築したことに多大な感銘を受けた。その試みは、米国の思想家ケン・ウィルバーの試みに似ていると言えなくもない。私は、既存の様々な叡智を統合しようとした人物に共感の念を持つ傾向があるのかもしれない。

今日も引き続き、作曲実践に有益な観点を獲得していく。来年、ないしは二年後あたりから、音楽理論のジャーナルに掲載されている論文を読み進めていこうと思う。過去に出版されている論文を全て読むことは、最低限必要なことである。過去の作曲家がどのようなことを試み、作曲上のどのような観点を持っていたのかを理解するためには、そうした学習は不可欠である。フローニンゲン：

2019/1/26(土)08:37

No.1613: A Winter Rhythm

I always feel that the rhythm of my body and that of seasons synchronize with each other.

Groningen, 21:13, Saturday, 1/26/2019

3735. サティとシャブリエ

気がつけば、時刻は午後の六時に近づいている。一月最後の週末の土曜日が、終わりに向かってゆっくりと進行している。

今日も自らの探究活動と創造活動に従事する充実した一日だった。バルトークに関する書籍を読み進め、バルトークから得られるものをできるだけ得たいという思いが日ごとに強くなっている。

夕食後の作曲実践では、まずはモーツァルトに範を求めるが、その後、バルトークの『マイクロコスモス』に範を求めて曲を作ろうと思う。バルトークの作曲技術に関する書籍の再読が半分以上終わり、明日は再読が完了しそうである。書籍の中に掲載されている楽譜を再現してみるのは、三読目からにすることにした。

夕方に、郵便受けに何かが届けられる音がしたので、一階に降りてみると、イギリスの書店に注文していた二冊の書籍が届けられていた。一冊は、“A Concise Explanation of the Church Modes (2018)”であり、もう一冊は、“Chorale Harmonization In The Church Modes (2018)”だ。どちらも共に、教会旋法について扱っている。先ほど中身をざっと確認してみたところ、期待通りの書籍であることがわかり、明日からそれらを読むことがとても楽しみだ。

作曲技術を高めるためであれば、なんでも学ぶという強い意志が自分の内側に芽生えている。そうした意志に従う形で今後も探究を続けていく。

この厳しい冬を乗り越えた後には、パリとアントワープに小旅行に出かけようと思う。パリの郊外に、サティの記念館があり、今回の旅行で訪問できるかわからないが、サティはいずれにせよ気になる作曲家の一人である。彼もまた、基本的にアカデミックな音楽教育を避ける形で、自己流で作曲をしていた人物である。同じくフランスの作曲家であるエマニュエル・シャブリエもまた、独学で作曲を学んだ人物であった。シャブリエの場合は、最初はサラリーマンとして働いており、勤め人であることをやめた後に作曲に専念するようになったという。

シャブリエは、作曲家としての活動期間は14年と短かったが、ピアノ曲で素晴らしいものをいくつも残している。彼の作風は、ドビュッシーやラヴェルへも影響を与えたと言われている。

私は偶然ながら、昨年六月にロンドン王立音楽院を訪れた際に、そこで偶然、シャブリエのピアノ曲の楽譜と出会い、それを購入した。もちろん、正規の音楽教育を受けた作曲家からも今後も学び続けていこうと思うが、作曲を独学で身につけた作曲家には惹かれるものがある。今夜もまだ時間があるので、作曲の実践と学習を進めていく。フローニンゲン:2019/1/26(土) 18:08

No.1614: A Dance of Pepper

Pepper can do a dance. So can a pepper mill and us. Groningen, 08:19, Sunday, 1/27/2019

3736. 今朝方の夢

穏やかな日曜日がゆっくりと始まった。数日前までは白銀世界であったが、昨日の雨により、雪が全て溶け、今この瞬間は闇の黒さが際立っている。昨日は雪が降らなかったが、なぜか雪のゆりか

ごにしているような感覚があった。そんな落ち着きのある土曜日だった。おそらく今日もそのような一日になるだろう。

いつも通り、今朝方に見た夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、見覚えのない部屋の中にいた。見るとそこには、二人の友人の女性がいて、彼女たちは何か工作をしていた。見ると、黒いハサミにセロハンテープの器具を取り付けて、新しいものを作っているようだった。

友人の一人が、「やっと完成したあ〜！」と叫んだので、完成したのを見ると、ハサミを用いて物質を切ることができながらも、セロハンテープを引っ付けることもできるらしい。元々の二つの器具の機能そのままであり、二つが合わさったことによって、何か新しい機能が生まれているようには見えなかった。だが、興味深いことに、セロハンテープを取り付けることによって、なぜだかハサミの切れ味が増しているようだった。

私は二人に声をかけ、「新しく生まれたものにさらに付加すると良いものがある」と述べた。そこで私はその部屋を出た。すると、部屋の扉の向こうには、巨大なホームセンターが広がっていた。それに気づいた時、私の体は突然宙に浮かび、ホームセンターの中を飛んで移動することになった。

ホームセンターの中には人が誰もおらず、中は青白い光に包まれていた。私は宙に浮かび、ゆっくりと飛びながら、ホームセンターに置かれている物を見ていった。ある時、眼下にパソコン売り場が見えた。そこに降り立とうと思った瞬間、私の身体はアジア大陸の上空にあった。そこから私は、北米大陸、南米大陸の上空を、先ほどとは打って変わって、尋常ではない速度で飛行した。気がつくと私は、また元の部屋の中にいた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は大学時代のゼミの友人と話をしていた。そこには、男性の友人が二人、女性の友人が二人いたのだが、男性の友人一人(FK)を残して、他の三人は一旦席を離れた。すると、その友人が、前回の研究発表のプレゼン資料作りの際に、少し問題があったと言う。彼は不満そうにそれを述べた。話を聞くと、彼が作ったプレゼン資料で研究発表に臨んだ際に、教授や他の生徒からあれこれと質問を受け、その時に決まって発表者の友人たちは、「そのように思っていたんですが、(そのように思っていたんですけど、資料が修正されていなかっただけです)」のような言葉を多用していたらしい。

彼は、「資料に不備があったのであれば、その時にちゃんと指摘してくれればよかったのに」と、不満げな表情を浮かべながら私に述べた。そのような話を彼から聞いていると、ゼミの友人たちが戻ってきた。すると、今話をしていた友人が、突然スーパーの袋に詰められたゴミを私たちに見せた。よくわからなかったが、彼の私的なゴミが一番下に捨てられていて、それは見てはいけないが、その上に私たちのゴミを捨ててもいい、と彼は言った。私たちは彼の言うように、手持ちのゴミをその袋の中に入れた。そこでまた夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/27(日)06:38

No.1615: Three Little Birds

Three little birds are gracefully flying in the world in my mind. Groningen, 12:21, Sunday, 1/27/2019

3737. 化学の授業に参加しようとする夢

たった今、一日分のコーヒーを作り始めた。午前六時半を過ぎたフローニンゲンの朝は、依然として闇と静寂が辺りを包んでいる。今日もまた、極寒の中休みのようであり、比較的気温は暖かい。

つい先ほどまで夢について振り返っていた。改めて、夢の世界の中で、あれほどまでに多様な体験をしていることを不思議に思う。夢は無意識の中の現象なのだが、それは確実に現実世界における身体や顕在意識下における精神に影響を与える。このように毎日夢を見て、それを書き留めることを始めてからどれくらいの日が経ったのかわからないが、夢を振り返れば振り返るほど、無意識の世界がより豊かになり、それが日々の探究活動と創造活動に少なからぬ影響を与えているのが見て取れる。

今朝方の夢の続きについてももう少し振り返っておきたい。夢の中で私は、ある小さなビルの中にいた。そのビルは縦長であり、およそ15階建てぐらいの高さを持っていた。また、ビルの外観は幾分古びた様子を持っていた。

私はビルの4階にいて、これから行われる化学の授業に参加しようと思っていた。それは、高校時代の化学の先生が行うものであり、有機化学について少し復習したいと私は思っていた。授業が行われる教室に早く着くと、まだ教室は開いていなかった。そのため、教室の前の廊下にあるテーブル

に腰掛けて、昼食を食べることにした。昼食をいざ食べ始めた瞬間に、このビルの警備をしている人が、私に声をかけてきた。

警備員:「どうやら教室が変更になったらしいです。それとこれを差し上げます」

警備員の方から受け取ったのは、化学の洋書のテキストだった。私は有機化学を復習したいと思っており、ちょうどそのテキストは有機化学を事細かに説明したものだだった。しかし、それはあまりにも専門的すぎて、私には幾分難しいように思えた。

私:「ありがとうございます。ちなみに教室はどこに変更になったのですか？」

警備員:「5階です」

授業の開始までもう少し時間があつたので、私は昼食を早く済ませ、警備員の方から教えてもらった5階に後ほど移動しようと思っていた。テーブルで昼食を食べている時に、ふと顔を上げると、目の前の教室のドアが開いており、中の様子が見えた。教室の中では、国語の授業が行われているようだった。教師は女性であり、授業に参加しているのは大人の女性ばかりであつたが、その中に一人だけ、若い男性がいた。彼らは皆日本人であり、和気藹々とした雰囲気の中で、国語の勉強をしている。その様子を見ながら昼食を摂り終えた私は、教室に向かうことにした。

時計を見ると、ちょうど授業が始まるほんの少し前だった。目の前のエレベーターに乗り、5階に向かおうとしたところ、5階を通り越して、11階まで行ってしまった。「しまった」と思って、再びエレベーターに乗って、5階に向かおうとすると、今度は3階に行き着いた。「おかしいな」と思って今度は3階から5階に上がっていかうとすると、なぜだか1階に着いてしまった。

1階でエレベーターの扉が開くと、目の前には幾分荒れ果てた山岳地帯が広がっていた。その景色を見たときに私は驚いたが、驚くよりも先に、早く5階に行きたいと思っていたところ、目の前に、高校時代の世界史の先生が現れ、エレベーターに乗り込んできた。

先生:「この前お前が送った請求書を見たんじゃがのう、「パン」という項目はないじゃろうが。もっと別の表現があるじゃろう。」

先生は苦笑いを浮かべながらそのように述べた。

私:「ああ、あの項目は、「交際費」と記入するべきでしたね。食べたのがパンだったのでつい」

私も苦笑いを浮かべながらそのように返答した。その後、先生と会話を続けていると、今度は無事に5階に到着した。エレベーターを出てすぐ右手にある教室では、すでに化学の授業が始まっていた。教室のドアを少しだけ開けて中を見ると、コンピュータールームのような場所で、数人の生徒たちが各自一台のパソコンを前にして授業を聞いていた。なぜか私はその光景を確認するだけで満足し、結局化学の授業に出席するのではなく、その場を後にした。そこで夢から覚めた。

そういえば、今朝方は、最初の夢として、前職時代の会社の社員旅行に出かけている夢を見ていた。宿泊施設が、オフィスとホテルが混合したような作りになっており、各部屋の外にはオフィスフロアが広がっているという不思議な作りになっていた。私は、「411」の部屋に宿泊することになっていたのだが、それがなかなか見つからず、フロアを行ったり来たりしていたことを覚えている。フローニンゲン:2019/1/27(日)07:10

No.1616: A Shining Sunset

Although it rained in the morning, it stopped in the evening. I could see a beautiful sunset. I was just seeing the glow of the sunset for a while. Groningen, 17:45, Sunday, 1/27/2019

3738. 穏やかな日曜日の始まり

起床した時には雨が降っていなかったが、先ほどから小雨が降り始めた。気温が少し暖かい日が続くのは嬉しいが、その代わりに、ここからしばらくは天気が優れない日となるようだ。

欧州での生活を始めて以降、身体のリズムと季節のリズムが調和を成しているようにいつも感じるようになった。まさに、天地と一体となった生活リズムで日々が進行していく。

一日分のコーヒーが出来上がったようであるから、ここからゆっくりと一日の活動を始めていきたい。今日は、過去の日記をいつもより多く編集したいと思う。ここ最近では、毎日20本ほどの過去の日記を編集しているが、今日はその倍の40本ほど編集をして行こうと思う。過去の日記を読み返したいと

いう気分にあるため、今日はあえてそうした気分左右される形で、いつもより多く日記を編集していく。現在執筆している日記に編集が追いつくまでには、もう少し時間がかかりそうだが、春を迎える頃にはそれが完了していることを願う。

今日もまた、作曲理論の学習を進めていく。まずは、バルトークの作曲技術に関する、“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000)”の再読を完了させたい。これはおそらく、今日の早い段階で完了するだろう。再読が終わったことをもってして、ここから実際に、バルトークの作曲技術を応用する形で実践を積んで行こうと思う。その他にも今日は、昨日届いた教会旋法に関する二冊の書籍、“A Concise Explanation of the Church Modes (2018)”と“Chorale Harmonization In The Church Modes (2018)”のどちらかを読み始めて行こうと思う。

教会旋法がどのようなものであるかは掴んでいるのだが、それを実際に曲に活用できる次元の理解力はない。どちらの書籍も具体例が豊富であるから、見よう見まねで、教会旋法を活用した曲を作っていく。

バルトークの作曲技術や教会旋法に注目をしているのは、端的には自分の作曲技術の幅を広げるためであるが、それ以外にも、やはり調性に縛られない作曲を行いたいという思いがあるからだろう。調性を意識した曲、調性に縛られない曲の双方を自由自在に作れるようになっていきたいと改めて思う。

監訳書のレビューもひと段落し、また、協働プロジェクトに関する仕事もないので、今日は一日中、探究活動と創造活動に従事することができそうだ。季節の進行に歩調を合わせる形で、自分の取り組みをゆっくりと前に進めていく。フローニンゲン:2019/1/27(日)07:29

No.1617: A Winter Call

It seems to me that I could hear a winter call at night. Groningen, 21:05, Sunday, 1/27/2019

3739. 創造的狂気を守ること・育むこと

時刻は午後の七時半を迎えた。つい今しがた夕食を摂り終えた。一月最後の日曜日がゆっくりと終わりに近づいている。今日の午前中は雨が降っていたが、夕方に雨が止み、黄金色の美しい夕日

を眺めることができた。夕日の輝きにも表情があり、時間の推移に応じて、その表情は豊かに変化していった。

ぼんやりと、夕日の輝きを眺める心のゆとりが夕方にあった。日々はこうしたゆとりと共に着実に進行している。

今日もまた、ライフワークに邁進するような一日であった。過去の日記の編集もはかどり、これまでほぼ毎日20本ずつ編集をしていたこともあってか、昨日あたりから突如として編集のコツのようなものが掴め、作業がより効率的に進むようになった。気がつけば、今日は100本ほどの編集を行っていた。来週もまた、今日ほどまでとはいかなくても、これまでよりも効率的な形で編集を進めていきたいと思う。

バルトークの作曲技術に関する書籍の再読が終わったので、本日より、“A Concise Explanation of the Church Modes (2018)”を読み始めた。本書は教会旋法に関する書籍だ。本書を一読することによって、そこからは積極的に教会旋法を活用した作曲実践をしていきたい。最初は実験的に、シンプルな構造の曲を作っていく。その実践に向けて、近日中に、作曲ノートに教会旋法に関するまとめを書き留めておこうと思う。こちらは、作曲理論に関するまとめをするためのノートであり、作曲実践を実際に行う時の補助ノートとはまた異なる。補助ノートとは、作曲をする際に、曲の番号や調号などを書き留めたり、コードや試したいアイデアを書き留めたりするために使っているノートだ。こちらのノートが、気がつけば一冊目が終わりそうになっている。

作曲実践を本格的に始めて、早いもので一年と数ヶ月経った。今このようにして、一冊のノートが終わりに向かっていく様子を眺めると、実践を小さく積み重ねてきたことを知る。これからも小さな積み重ねを継続していく。決して大きな積み重ねではなく、実験的な積み重ねを絶えず行っていく。

就寝までにまだ時間があるので、もう少し上記の書籍を読み、本日最後の作曲実践をその後に行いたい。

本日もふと、学校教育や伝統的な大学で慣習的な教育を受けることは、創造力を枯渇させかねないということについて考えていた。過去に、ある種狂氣的とも言えるほどに創造活動に従事した画家や作曲家は、伝統的な教育の枠組みに収まって実践をするような人物では決してなかった。伝

統的な学術機関に守られる形で優れた作品を残した画家や作曲家は多数いるが、狂気的ないしは病的なほどに創造活動に取り憑かれた人をほとんど知らない。この狂気的ないしは病的とも言えるほどの創造活動こそが、自分が心から従事したいと思っているものだ。

学術機関で作曲に関するトレーニングを受けていないということは、そうした創造活動に従事する可能性を残してくれている。あとは、自らで技術の基礎を固め、絶え間ない学習を自らに課していくことが必要になるだろう。

学術機関で提供されている知識やトレーニングは体系立てられており、非常に緻密な構造を持つことは確かだ。だが、そうした特性が逆に制約となり、個人に宿る固有の創造的狂気を希薄化させてしまっているように思えてくる。私は、何としても自分の内側にある創造的狂気を諸々の制約から守り、むしろそれを大きく育てていきたいと思う。フローニンゲン:2019/1/27(日)19:53

No.1618: A Running Snowman

I feel at this moment in the early morning that a snowman is running, doing a comical and energetic dance. Groningen, 07:35, Monday, 1/28/2019

3740. 今朝方の夢

今朝は五時半前に起床し、六時を迎えるあたりに一日の活動を始めた。今日から新たな週が始まった。

午前六時を迎えた現在は、辺りは闇と静寂さに包まれている。今朝は雨が降っておらず、気温もそれほど低くはない。今日の最高気温は4度、最低気温はマイナス1度とのことである。午前10時から昼過ぎまで雨ないしは雪が降るようだが、それ以外の時間帯は曇りとなりそうだ。

いつもと同じように、夢の振り返りをまず行っておきたい。今朝方は色々と夢を見ていたはずなのだが、どの夢もそれほど覚えていない。書きながら夢を思い出すことを期待したい。

夢の中で私は、ある女性の知人の方の自宅にいた。その方の自宅は、なぜだかとても狭く感じられ、間取りに関して言えば、私が大学時代に住んでいた部屋に似ている。知人の方の自宅には私以外

にも何人か人がいたのだが、私は彼らとは面識がなかった。その場にいた全員と和気藹々と話をしていたところ、私は急にトイレに行きたくなった。そのため、知人の方にトイレの場所を聞き、トイレに向かった。

トイレのドアを開けると、そこには、妙に右側の壁に寄った便器があった。私が便器の方に近寄ると、突然、便器の向こう側に取り付けられていたシャワーからお湯が出始めた。私はそのお湯を浴びてしまい、なんとか早くシャワーを止めようと思ったのだが、一向に上手くいかない。そのため私は逃げ出すようにトイレから一度出て、知人の方を呼んだ。

「トイレからシャワーのお湯が出始めて、それが止まらないんです」と私が述べると、知人の方は少し呆れた表情を見せながら、「そんなの簡単に止められるはずですよ」と述べた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は新大阪の駅にいた。新大阪は前職時代に私が住んでいた場所であり、駅の様子は知っている。どうやら私は、新大阪からオフィスのある淀屋橋に向かおうとしているようだった。新大阪駅に到着すると、どうもいつもの駅の様子とは異なる。日本人が少なく、やたらと外国人が多い。その多くは白人のアメリカ人なのだが、中にはアフリカ系アメリカ人もいた。

私はある知人の方と駅で待ち合わせをしていたのだが、待ち合わせ場所がどこだかまいちわからなかった。携帯の地図を開くと、待ち合わせ場所がアイコンで光っており、私が今立っている場所は別のアイコンで点滅していた。どうやら待ち合わせ場所とは少し違う場所にいることがわかり、私は地図を片手に目的の場所に向かった。ふと、目の前にスタバがあったので、そこでコーヒーでも購入しようかと思った。

だが、まずは待ち合わせ場所に行くことが先決だと思い、コーヒーを購入することをしなかった。というよりもむしろ、そこには誰も店員がいなかったのであるから、コーヒーを購入することなど最初からできなかつたのである。

それにしても、駅の雰囲気がいいつもより暗い。物理的に照明の光も暗い。それでいて、人もまばらであり、まばらに見える人たちは大抵がアメリカ人だった。

しばらく駅構内を歩いていると、遠くの方から賑やかな声が聞こえてきた。そこに近づいてみると、なんとバスケのダンクコンテストが行われていた。後ろから見ていると、それはとても面白そうであり、私も参加したいと思った。通常、ダンクなどできないのであるが、夢の中の私は驚異的なジャンプ力を持っており、それが容易であった。

いざ自分の番が回ってきた時に、そういえば私は今からオフィスに向かおうとしており、さらには知人の方と待ち合わせをしていることを思い出した。結局私は、ダンクコンテストに参加することをせず、待ち合わせ場所に再び向かった。

駅構内の真ん中にある横幅の広い大きな階段を下りてみた。そこから少し歩くと、あまり人目につかないような通路が駅の中にあり、その通路の奥の左手にはトイレがあり、右手にはまたしてもスタバがあった。通路の行き止まりまで歩くと、そこには二人のアメリカ人女性がいて何かを話していた。行き止まりから引き返し、私は再び待ち合わせ場所を探すことにした。フローニンゲン:2019/1/28 (月)06:25

No.1619: Winter Shimmer

I can see an ineffable shimmer of winter in desolate winter scenery. Groningen, 12:25, Monday, 1/28/2019